

## おしどり

L. ハーン原作  
福沢正男・訳

陸奥国の田村郷という所に、村充(そんじょう)という、鷹匠でまた猟師でもある男がいた。ある日、彼は猟に出掛けたが、獲物を見つけたことができなかった。ところが、帰る途中赤沼と呼ばれている所で、彼は自分の渡っている川を一对のおしどりが仲良く泳いでいくのを発見した。おしどりを殺すことはいいことではない。しかし村充は非常な空腹を覚えていたので、つがい目がけて矢を射た。彼の矢は雄の方を貫いた。雌の方は向こう岸のイグサの群の中に逃げ込んで姿を消した。村充は死んだ鳥を持ち帰り、それを料理した。

その夜、彼は気味の悪い夢を見た。それは一人の美しい女が彼の部屋へ入ってきて、彼の枕元に立ち、泣き始めたというものであった。女は、村充がそれを聞くとまるで胸が引き裂かれるのかと思うほどに激しく泣くのだった。そして女は彼に向かって叫ぶのだった。

「なぜ、あななぜあなたはあの人を殺したのですか？あの人を犯したどんな罪のために？……赤沼ではわたしたちは互いにとても幸福でした。それなのにあなたはあの人を殺した。……これまでにあの人があんな危害をあなたに加えたのですか？あなたは自分がどんなことをしたのか、よくわかっているのですか？ああ！あなたはどんなに残酷な、どんな悪いことをしたのか、わかっているのですか？あなたはわたしをも殺してしまつたのです。——夫なしにわたしは生きていくつもりはありません！……このことを告げるためにわたしはやってきたのです」……それから女はまたしても大声で泣くのだった。それはあまりに激しくうらみがましいので、女の泣き叫ぶ声が、聞いている者の骨の髄にまで貫いた。——そして、女はこんな歌を涙ながらに詠んだ。——

『日暮るれば誘いしものを

赤沼の

真菰がくれのひとり寝ぞ憂き』

〈日没の頃にはわたしはいっしょに帰るためにあの人を誘つたものだ——！今、赤沼の藪(い)の陰にひとりねることは——ああ！なんといいようもないほど不幸であることか！〉

そしてこの歌を詠んだあと、女は突然大声で叫ぶのだった。「ああ、あなたにはわかつていない——あなたには自分が何をしたのか悟ることはできない！けれども、あした、あなたが赤沼へ行くならば、あなたにもわかるでしょう、——あなたにも……」そういいながら、そしてなんとも哀れをそそるように泣きながら、女は立ち去つた。

翌朝村充が目を覚ました時、この夢は彼をひどく悩ませるほど非情に鮮やかに心に残っていた。彼はあの言葉を思い出した。——「けれども、あした、あなたが赤沼へ行くならば、あなたにもわかるでしょう——あなたにも」

そこで彼は、自分の見た夢が単なる夢以上のあるなものかなのかどうか、わかるかも知れないと思ひ、すぐそこへ行こうと決心した。

そうして彼は赤沼へ行った。すると、川の土手まで来た時、彼は一羽の雌のおしどりが泳いでいるの

を見た。同時にその鳥が村充に気づいた。しかし逃げようとするかわりに、その鳥は奇妙な目つきでじつと彼を見つめながら、まっすぐ彼のほうに泳いできた。そして、くちばしで不意に自分の身体を引き裂き、獵師の目の前で死んでしまった。……

村充は剃髪し、僧侶になった。

《テキストは成美堂「KWAIDAN」(昭和38年)を用いた。また、古谷綱武編「古泉八雲集」上

巻(新潮文庫)を参考にした。尚、この話の原典は橘成季編「古今著聞集」(1254年)にある。

—訳者—